

竹川病院 紫垣 方美(看護部長補佐)

功 績 病棟管理者として全力を注いで培ってきた経験値が、入院調整・ベットコントロール業務に適応できており、3・4月は安定的な入院患者が確保され、ほぼ満床状態となるスムーズな受入態勢を短期間で確立。働く環境やポジションが変わっても、新たな取組みにチャレンジし最大の利益を生み出そうと努力して、看護部に新たな働き方を提供してくれた功績

推 薦 者 院長 田中 眞 Ma-D 間山 文博

推 薦 理 由 医療相談室責任者の退職により、入院調整・ベットコントロール業務を引き継ぎましたが、病棟管理者として全力を注いで培ってきた経験値がしっかり適応できており、ほぼ満床状態となるスムーズな受入態勢を短期間で確立しました。働く環境やポジションが変わっても、新たな取組みにチャレンジし最大の利益を生み出そうと努力する姿は、まさに職員の見本であると考え推薦させていただきました。

内 容

病院の生命線である前方連携を看護師が行うのは理想です。紹介元急性期病院からの診療情報の把握、またそれを医師、病棟に伝えるのが正確迅速になり、入院がスムーズに行えるからです。紹介元急性期病院の退院支援が看護師であればなおさらのことです。東京一のリハビリテーションを目指すために、いつかは通らなければならない課題であるといっても過言ではありません。

看護部長補佐の紫垣は、夫が下関に異動になったこと、幼児を抱えながら、産休後竹川病院での勤務を望み、看護部長補佐として、後輩の指導、相談に応じてくれ、まさに看護部の光のような存在でした。しかしながら、前述の家庭の事情から、いよいよ下関に行かなければならなくなりました。退職時期は5月の上旬です。そのような中、相談室の責任者が3月に退職することになり、病院の生命線ともいえる前方連携をどうするか?が大きな問題となりました。

ことの重要性をひしひしと感じていた紫垣は、退職するまで、最後にお役に立ちたいということで、看護師による前方連携を仕組み化し、後継者に引継ぐ役割を買って出てくれました。

結果は現在の満床超過がすべてを物語っております。さらに紫垣がよい手本になったので、北野前師長が紫垣退職後担当したいと立候補してくれました。

退職する看護師ですが、いままでの輝かしい功績を感謝するとともに、理事長賞によって後輩に語り継ぎたいと思い、理事長賞に推薦いたします。